

とーりまかし
別冊

研究年鑑 2023



テーマ **4**

地球コクリ!2023
地域の未来の担い手と意志ある大人たちの
共創による

持続可能な地域産業を創出する 探究型教育& 人材育成プログラム

研究員

三田 愛

さんだ あい

地球コクリ!は、地球生態系全体の「コ・クリエーション(共創)」によって新しい価値創出を図る研究である。地域社会を地球の縮図と考え、人の意識変容が地域変容に結びつく共創の研究を進めている。その一環として始めたのが、小中学生向けの「持続可能な地域産業を創出する探究型教育&人材育成プログラム」の研究・提供だ。

日本の学校教育では、いま「探究学習^{※1}」が注目されている。生徒たちが答えのない問いに向き合い、自ら調べたり話し合ったりしながら、問題の

解決策を探究する学習のことだ。本プログラムは、学校と地域が力を合わせて子どもたちの探究の機会を創り、10年後、20年後に地域産業を盛り上げてくれる「地域社会の未来の担い手」を小中学生のうちから育成することを目指している。

また本プログラムには、小中学生が社会人や大学生と同じように「答えのない問いに主体的に向き合う経験」を積むことで、社会で活躍するときに必要な力をいち早く身につけてもらう狙いもある。中学校での実証実験の事例を紹介する。

※1 探究学習(総合的な学習(探究)の時間) / 総合的な学習(探究)の時間は、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものである。(文部科学省Webサイトより)

地球コクリ!2023 地域の未来の担い手と
意志ある大人たちの共創による

持続可能な地域産業を創出する 探究型教育&人材育成プログラム

研究員
三田 愛
さんだ あい

第1章 目的

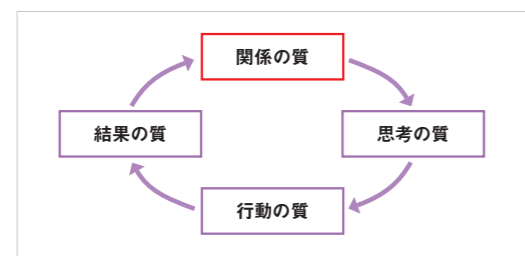
中学までに地域産業と関わる機会を創り 地域の未来の担い手を増やす

地域を教材化した学習プログラムは、子どもたちを「地域の未来の担い手」へと育成する大きなチャンスである。子どもたちが、総合的な学習の時間を使って、地域の産業・暮らし・歴史などを自分たちで調べたり、地域で働く大人たちと接したりしながら、地域産業にまつわる「答えのない問い」を主体的に探究していくことは、地域産業への興味・関心を高める可能性が高い。なかには「自分の住む地域には、面白いビジネスを展開できる可能性がある」と気づく生徒もいるだろう。

ただし、子どもたちは、小中学生時代は実家の近くにある学校に通うことが多いが、高校以降は地域外に進学・就職するケースが増える。だから、地域の未来の担い手を育成するのなら、小中学生のうちに地域産業と関わる経験を積んでもらうことが効果的だ。逆に言えば、中学校卒業までに地域産業との関わりを持たないと、高校・大学以降は首都圏や大都市圏に進学・就職し、地域産業とは関係のない人生を送ってしまう可能性が高い。小中学生のうちに地域産業とのつながりを形成することが大切なのだ。

地球コクリ!が進める「持続可能な地域産業を創出する探究型教育&人材育成プログラム」は、小中学生に地域産業と親しんでもらい、地域の未来の担い手を育て、中長期的な地域づくりにつなげることを狙っている。

図1 ダニエル・キム(MIT組織学習センター
共同創始者)の成功循環モデル



本プログラムでは、「関係の質」を高めることを重視している。なぜなら、成功循環モデルに従えば、関係の質を高めることが、思考の質・行動の質・結果の質の向上につながるからだ(図1)。生徒たちにとって、地域の働く大人たちと接したり、共創したりすることは、学校や机上に閉じない多くの価値観に触れる経験になる。人や地域とのつながりが生まれ、「自分と地域」「自分と社会」を感じることが日常的になるはずだ。そうすれば、日常的に「自分はどう生きたいか」「自分は社会や地域とどうありたいか」を考える機会をつくり、行動する人が増えるだろう。行動が結果に現れるようになり、これまで以上に地域や社会が元気になっていくことが期待できる。

このような生徒と地域の大人の関係だけでなく、生徒たち同士、学校と地域など、あらゆる面で関係の質を高めることを目指している。

これが本プログラムの目的だ。なお、対象者は小学5年生から中学2年生までを想定している。

第2章 手法

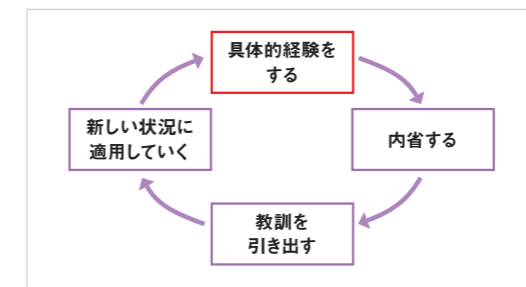
学校と地域の共創体制をつくることが より良い地域づくりにつながる

目的を達成するために欠かせないことが2つある。1つは、学校と地域の共創体制づくりだ。

地域を教材化した学習プログラムは、子どもたちが学校外の社会について主体的に調べて考えるもので、学校外の知識やつながりが必要になる。多くの先生が多忙を極めることを踏まえると、先生だけでプログラムを制作・実行するのは不可能に近い。しかも、小中学校の先生は数年で異動になる可能性が高いから、仮に突出した能力を持つ先生が独力で優れたプログラムをつくれたとしても、その先生がいなくなった途端、再現できなくなる。そのため現状は、既成の学習プログラムを活用する取り組みにとどまってしまうことが多い。

しかし、本プログラムのような地域産業を対象とした学習プログラムは、当然ながら地域ごとに内容が異なるため、各地域・各学校が自分たちに

図2 デイヴィッド・コルブの経験学習モデル



合ったものを用意する必要がある。

そこで欠かせないのが、地域の協力だ。学校の先生たちと地域の共創体制を構築できれば、その地域に根づいた学習プログラムを継続的に用意し、実行できるだろう。その結果として、学校と地域の関係性が深まることは、他の面でも地域にとってプラスにつながるはずだ。

本プログラムは、先生だけでなく、地域の意志ある大人たちにさまざまな面から関わってもらい、学校と地域の関係の質を高め、持続的な共創体制を築くことを目指している。

優れた探究学習プログラムが 子どもたちの「主体性の回復」を実現する

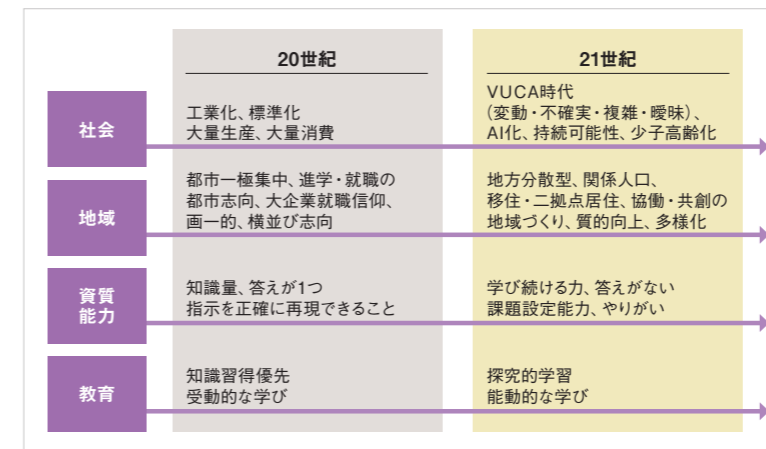
地域の担い手を育てる上でもう1つ欠かせないのは、当然ながら、優れた学習プログラムを用意することだ。作成する際、特に大事なものは、次の3点である。

- ①生徒たちに答えのない問いを与えること
- ②生徒たちが主体的に取り組めること
- ③毎年同じように実行できること

本プログラムではさらに次の点も重視している。

- ④地域に特徴的な何かを扱うこと

図3 社会変化の流れ



- ⑤地域の人たちと接すること
- ⑥持続可能性の視点を持ってもらうこと
- ⑦子どもたちを中心に地域の共創が生まれ、
新たな価値を創造すること
- ⑧実社会のように顧客を意識すること
- ⑨生徒たちが自ら経験学習モデルを回すこと

本プログラムが目指すのは、小中学生の生徒たちに、社会人や大学生と同じように「答えのない問い」に向き合う経験をしてもらい、「自分ならどうするか?」を真剣に考えてもらうことだ。なぜなら、小さな頃から社会人・大学生と同じような実践的な探究の訓練を積むことが、自身の経験と自信になり、社会に出たときに役立つからだ。

2017年から改訂された新しい学習指導要領は「生きる力」を最重視している。子どもたちが生きる力を高めるには、まずは自分で考えて行動を起こす姿勢を獲得する必要がある。私たちはそれを「主体性の回復」と呼んでいる。本プログラムは、生徒たちの主体性を回復させ、生きる力を高めるための学習プログラムである。

本プログラムでは、生徒たちはさまざまなツールを使いこなしながら、自分たちで調査したり、企画アイデアを出したり、成果物を制作したりする。実際にビジネスのプロが行うのと同様のプロセスで、答えのない問いに取り組むのだ。驚くことに、彼・彼女たちはツールを使いこなすスキルを短期間で身につけ、自分たちの力でやり遂げる。これこそが「主体性の回復」である。このときに最も大切なのは、先生や親、周囲の大人たちが、生徒たちを信じて任せることだ。

主体性を回復するときには、生徒たちに「デイヴィッド・コルブの経験学習モデル」(図2)を回してもらおうのが効果的だ。本プログラムは、経験学習モデルを回して、「自分たちにも地域産業を盛り上げる糸口をつかむことができる」という成功体験を得てもらうことを目指している。

なお、地球コクリ!では、探究学習を図3の位置づけで捉えている。本プログラムは、21世紀のVUCA時代、多様性の時代に適した学習方法である。

地球コクリ!2023 地域の未来の担い手と
意志ある大人たちの共創による

持続可能な地域産業を創出する 探究型教育&人材育成プログラム

第3章 結果

長野県塩尻市立塩尻西部中学校の実証実験 「ふるさとぶどう学」

2022年度、地球コクリ!は、赤井友美氏^{※2}との共同研究で、長野県塩尻市立塩尻西部中学校に、「持続可能な地域産業を創出する探究型教育&人材育成プログラム」を提供した。

塩尻西部中学校では、2021年度は1年生が総合的な学習の時間に「桔梗ぶどう学」として、地域の大事な産業であるぶどうを「知る・わかる」探究学習をした。2022年度は、この桔梗ぶどう学を発展させる形で「ふるさとぶどう学」を実施した。これが本プログラムである。知る・わかるを超えて、「ぶどうをとりまく地域の魅力を考え、社会に伝える授業」に進化させた学習プログラムだ。

表1が、ふるさとぶどう学の年間スケジュールである。前半の5月～7月は、学校内にあるぶどう園で自分たちでぶどうを育てたり、ぶどう農家の方の話を聞いてもらったりした。

その上で、9月から翌年2月までの半年間にわたって、ぶどうにまつわる2種類の廃棄物を活用した新商品開発と、広報・販売促進に取り組んでもらった。1つ目の廃棄物は、ワイン醸造時に出るぶどうの搾りかす「ワインパミス」だ。もう1つは、毎年大量に廃棄されている「ぶどうの枝」である。子どもたちが行ったのは、この2つの廃棄物を使った新商品のアイデア出し、新商品案の決定、広報宣伝活動だ。

地域特有の廃棄物を活用したのは、SDGsや地域の持続可能性を意識するとともに、気軽に提供していただきやすいこと、地域の協力を得やすいことも踏まえてのことである。

表1 2022年度塩尻西部中学校ふるさとぶどう学の年間スケジュール

月	テーマ	配当時間	内容詳細
5月	オリエンテーション: 「ふるさとぶどう学」について ぶどうの地域指導者(農園や組合組織の方々)の方に取材する	1 授業外	「ふるさとぶどう学」に取り組む意味について考える これからどんな取り組みをするのかを知る 数人で1グループになり ・ぶどうに関わる仕事を選択するきっかけ・今、どんな課題があるのか ・これまで「ファンを増やすこと」に対してどんなことをしてきたのか などを取材する
	取材した情報を整理しよう	1	取材で浮かび上がった情報を整理する
6月	SDGs・持続可能性について知ろう	1	ぶどうやワインの裏にはたくさんのワインパミスや剪定枝が出ることを学ぶ/地球コクリ!短編映画「Re-member」上映
7月	ぶどう農家の方の講話 ぶどう笠かけ	1 1	校内のぶどうを手入れしてくださっているぶどう農園の方の講話を聞き、ぶどう農家の仕事、塩尻のぶどうについて深く知る ぶどうの笠かけ体験を実際に行う
9月	オリエンテーション:商品企画とプロモーションについて ぶどうの収穫体験	1 1	ワインパミスや剪定枝などを活用した「商品企画」と「プロモーション」に取り組むことを伝える ぶどうの収穫体験を実際に行う (ここで収穫したぶどうはジャムへ加工し販売)
	商品企画のアイデア出し アイデアを周りに知ってもらおうチラシを作る	1 1	チームごとにブレインストーミング法で商品のアイデア出し チームで出したアイデアを1、2点に絞り、その商品を作りたい!と校内にアピールするためのチラシを作る(プロモーションする際に考えることを学びながら、IT機器やクラウドシステムに慣れる)
	試作品候補決定のための校内投票	1	地域の方に試作品をお願いするため、生徒が見つけたチラシを集め、校内投票を実施
10月	ジャムのパッケージ作り	2	9月に収穫したぶどうをジャムにして販売するため、パッケージを考えてつくる(商品に自分たちの売りや強みを含めることを学びながら、IT機器やクラウドシステムに慣れる)
	「株式会社塩尻西部中学校」の担当チームに分かれよう	1	各チームの目的とやることを知り、自分が関わりたいチームを決める。 パッケージチーム、コンセプトチーム、ホームページチーム、チラシチーム、動画チーム、メディア・広報チーム
11-12月	チーム活動	7	「つくりたい未来」の実現や「気になる現状」の解決につながるアクションを各チームで実施 各チームごとにフレームワークとなる資料スライドを用意 資料スライドでは「考えること」「作るもの」が提示され、その資料にそって、成果物を制作
1月	これまでの学びを整理して、プレゼンテーション資料をまとめよう、練習しよう	3	プレゼンテーションのフレームワークと評価ポイントを提示 それらを使いながら、各チームでプレゼンテーション資料作成、練習
2月	発表会	4	2コマでリハーサル実施、翌週の2コマで本番 校内及び地域の方々に向けてプレゼンテーション
	自分の学びを振り返ろう 授業時間数合計	1 28	1年間のまとめ、生徒アンケートの取得

※2 赤井友美氏(株)4smiles代表取締役。未来共創イノベーション代表理事。子供教育創造機構理事。イマココラボフェロー。神山まるごと高専教員アドバイザー。熊本県南小国町教育委員会アドバイザー、山形県鶴岡市キャリア教育アドバイザーも務める。

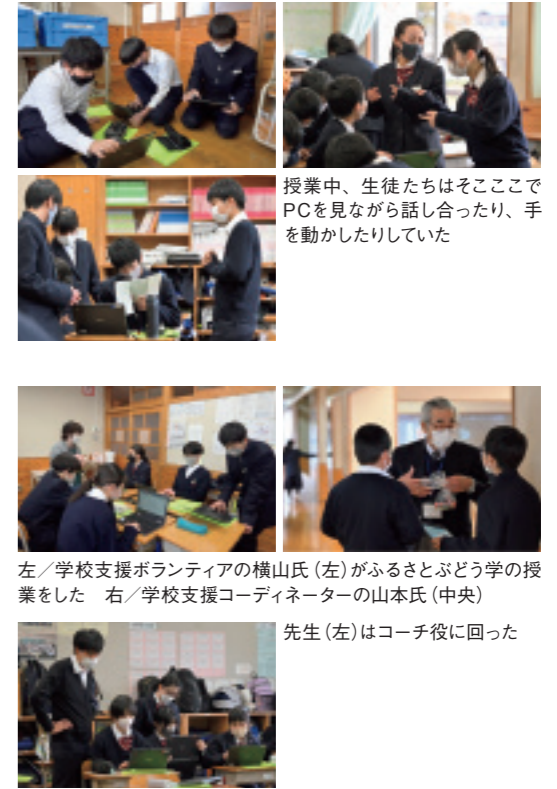
地域教育協議会のボランティアが授業を行い、先生はコーチ役に回った

ふるさとぶどう学には、塩尻西部中学校の先生たちとJRC・赤井氏以外にも、塩尻市のさまざまな方に関わっていただいた(図4)。

学校と地域のつなぎ役を担っていただいたのは、「学校支援コーディネーター」の山本氏だ。塩尻市内での長年の営業経験を活かして、コーディネート力を存分に発揮していただいた。

授業を先導したのは、先生ではなく、横山氏、星井氏をはじめ、校内で読み聞かせなどを行ってきた「地域教育協議会の学校支援ボランティア」の皆さんだ。一方で、先生はコーチ役として生徒たちを見守り、悩んでいるときや行き詰まっているときに相談に乗ってもらうようにした。これは、生徒と地域の接点を増やし、同時に先生の負担を減らすことを狙った画期的な取り組みである。

全体アドバイザーは、塩尻商工会議所の篠原

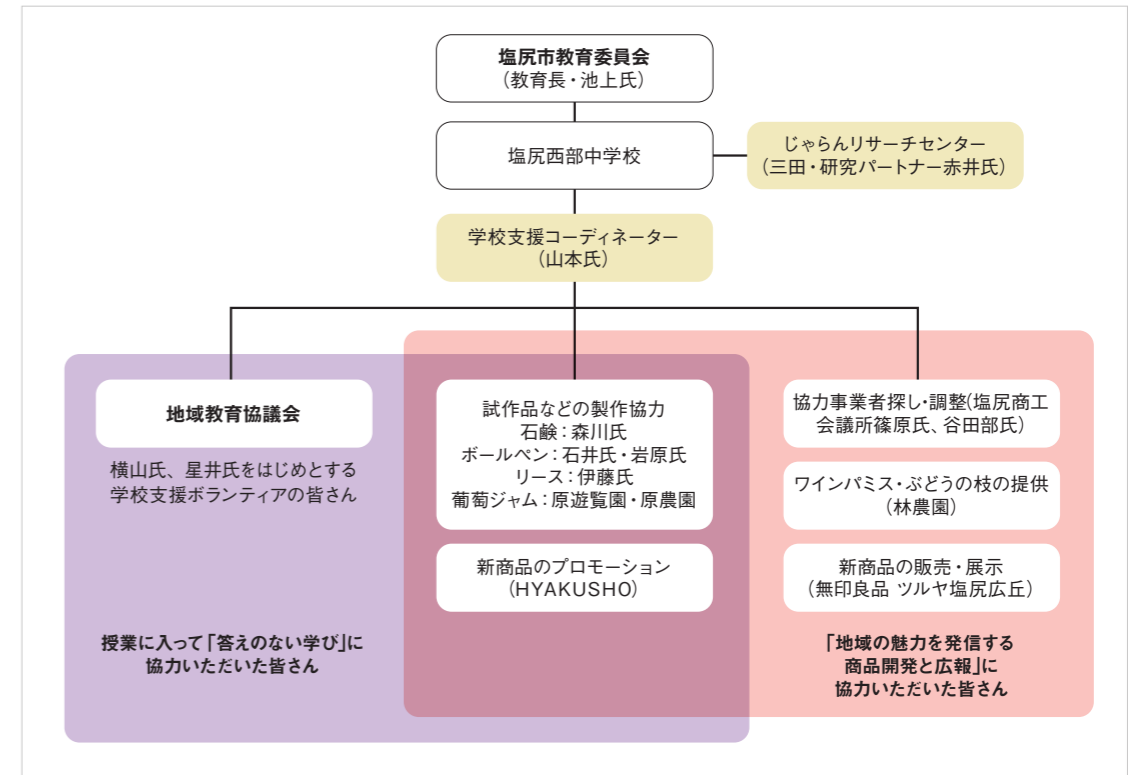


授業中、生徒たちはここでPCを見ながら話し合ったり、手を動かしたりしていた

左/学校支援ボランティアの横山氏(左)がふるさとぶどう学の授業をした 右/学校支援コーディネーターの山本氏(中央)

先生(左)はコーチ役に回った

図4 2022年度塩尻西部中学校ふるさとぶどう学の共創体制



地球コクリ!2023 地域の未来の担い手と
意志ある大人たちの共創による

持続可能な地域産業を創出する 探究型教育&人材育成プログラム

氏・谷田部氏にお願いした。どの廃棄物を活用するのがよいか、製造・販売を誰にお願いするか、といった相談に乗っていただいた。篠原氏はこう語った。「実は塩尻商工会議所では、2022年から、地元企業経営者が中学校で仕事について語るイベントを始めたところでした。長野県の若者の約80%が進学や就職で県外に出ると言われていますが、県内出身学生のUターン就職率は36.5%（2022年度実績・長野県調べ）にすぎません。地域の担い手不足は大きな課題であり、塩尻市に戻ってくる若者を増やす必要があります。そのためには高校生だけでなく、中学生にも働きかける必要があるというのが私たちの考えです。つまり、もともと地球コクリ!の皆さんに近い考えだったわけです。商工会議所はすぐに協力を決めました」。

ぶどうのジャムは、原遊覧園・原農園に作っていただいた。試作品と商品は、森川氏（石鹸）、石井氏・岩原氏（ボールペン）、伊藤氏（リース）に作

っていた。ワインパミスとぶどうの枝は林農園に提供していただいた。プロモーションはHYAKUSHOに支援していただき、新商品の展示・販売は、無印良品ツルヤ塩尻広丘で行った。

以上の皆さんには、必要に応じて教室に来ていただき、生徒たちと直接接していただいた。社会人との接点が少ない中学生にとって、彼らのような「地域の働く大人たち」と接し、働く姿を生で見る機会は貴重である。

生徒たちの主体性の回復のために 欠かせない「オリジナル授業用スライド」

11月～12月には、パッケージチーム、コンセプトチーム、ホームページチーム、チラシチーム、動画チーム、メディア・広報チームの6種類のチームに分かれて、4人1組・全16チームでチーム活動を行った。その際、赤井氏が中心となって制作したオリジナルの「授業用スライド」を使用した(図5)。特徴は、「生徒たちが主体的に取り組めるようになっている」ことだ。スライドに沿って進めれば、自分たちだけで新商品のアイデアを考えたり情報を調べたり、広報物・販促物を制作したりできるのだ。生徒たちが主体性を回復させるために欠かせないツールである。

制作の際には、グラフィックデザインツール「Canva」をはじめ、さまざまなツールを使用した。生徒たちは、たった4か月でこれらのツールを使いこなせるまでになった。チームワークの面でも、生徒たちは学ぶことが多かったはずだ。

「EDAPEN」「枝リース」「ワイン石鹸」の3つの新商品を開発した

最終的に、生徒たちは3つの新商品を開発した。ぶどうの枝を自然のままに使った、すべて1点もののボールペン「EDAPEN」。ぶどうの枝を活用した「枝リース」。ワインパミスを使い、肌に優しいポリフェノールやココナツオイルを含んだ「信州塩尻ワイン石鹸」。以上の3つである。商品の試作品制作や製造は、先ほど紹介した地域の事業者の皆さんが支援したが、商品の企画・開発や



EDAPENのチラシ(左)とニュースリリース(右)



EDAPEN・ワイン石鹸のパッケージ



左からEDAPEN、枝リース、信州塩尻ワイン石鹸

広報宣伝物の制作はすべて生徒たちが行った。具体的には、3つの商品ごとにパッケージ、コンセプト、チラシ、ホームページ、動画を作成し、3商品合わせてのプレスリリースを行った。

地元の無印良品で展示販売や広報を展開 学内外で生徒たち主体のプレゼンも

単に広報宣伝案をつくるだけでなく、2023年2月、無印良品ツルヤ塩尻広丘の協力を得て、生徒たちは実際に展示販売を行い、その場で自分たちの広報宣伝を展開した。また生徒たちは、学校内では2・3年生に向けて、塩尻市コミュニティ・スクール市民集会では市長や教育長をはじめ学外のさまざまな人に向けて、取り組んだ内容を自分たちでプレゼンテーションした。広報宣伝やプレスリリースのかいあって、地元のいくつかのテレビ局や新聞社が、ふるさとぶどう学の取り組みを取材し、地元新聞の一面などに取り上げてくれた。

生徒たちが「ああしたいこうしたい」と 事業所の方々に要望できるようになった

制作物だけでなく、「生徒たちの成長」という意味での成果も出ている。塩尻西部中学校校長の小林真氏はこう語る。「生徒たちの多くは、ふだんは先生と家族以外の大人とはほとんど接しません。この授業を通して、彼らがさまざまな働く大人と



無印良品ツルヤ塩尻広丘での展示販売の様子



関わったことがプラスになっています。たとえば、授業が進むうちに、生徒たちが『ああしたいこうしたい』と事業所の方々に要望できるようになりました。無印良品ツルヤ塩尻広丘での展示販売も、生徒たちが『多くの人に向けて発表したい』と主張したことがきっかけで実現したものです。彼らの意欲は授業が進むにつれて高まり、たとえば『動画を最高のものにしたい』と突き詰めた生徒がいました。関係の質を高めるといって地球コクリ!の手法が、彼らを主体的にしたのです。学習指導要領が求める主体的・対話的で深い学びをまさに実現できた授業だった、と感じています」。

また、商工会議所の篠原氏は次のように語った。「私は以前から、社会人は『3つのN』、つまりコミュニケーション、ドキュメンテーション、プレゼンテーションを身につけるべきだ、と考えています。今回の探究学習プログラムは、まさに中学生たちが3つのNを体験的に学ぶ授業で、素晴らしいと感じました。生徒たちは、自分たちで塩尻のことを調べ、話し合い、考えをまとめてプレゼンテーションしました。この経験は、間違いなく地域への愛着を深めたはずで」。



塩尻西部中学校校長 小林 真氏 塩尻商工会議所専務理事 篠原 清満 氏

「今度は、自分から地域の人たちと 交流する機会をつくれたら」と生徒が語った

3名の生徒たち(青柳結唯さん、小川太一さん、安藤日向さん)にも話を聞いた。

図5 授業用スライドの一部

図5は、授業用スライドの一部を示しています。左側には「各チーム(原案)紹介」の表があり、6種類のチームとその役割がリストアップされています。右側には「コンセプトの最終のFinal Answerを決めよう」というワークシートがあり、生徒たちがアイデアを整理し、最終的な答えを決めるためのプロセスが示されています。また、「パッケージチームの11月12月の流れ」や「ホームページの構造はどうなってるの?」といった具体的な学習ステップも示されています。

生徒たちはこの6種類のチームに分かれて探究学習を行った

最初に、チームごとに3か月間の学習の流れを提示し、スケジュール感を示した

次に、各チームに必要な基本の方法や型を手渡した。たとえばホームページチームなら、サイトマップ構造である

そのうえで各チームに向けて、このように書き込んだり貼り付けたりしていけば、自分たちだけで主体的に取り組めるスライドを用意した

地球コクリ!2023 地域の未来の担い手と
意志ある大人たちの共創による

持続可能な地域産業を創出する 探究型教育&人材育成プログラム

3名とも最初は不安だったが、やっていくうちに楽しくなり、最後には達成感が得られたという。「最初は、本当に自分たちでチラシなんて作れるのかなと思いました。でも、実際にやってみるとデザインを考えるのが楽しくて、でき上がったときには達成感がありました」(青柳さん)。「ボールペンのパッケージチームに入りました。もっとよくしようと何回もつくり変えて、シンプルでわかりやすいパッケージができました」(小川さん)。「探究学習が今年から変わると聞いて不安いっぱいでしたが、最後のプレゼンのときにはワクワクに変わっていました」(安藤さん)。

チーム行動も新鮮で面白かったようだ。「チームみんなで考えたからこそ、良いチラシが完成したと思います」(青柳さん)。「一人だったら、きっと途中で投げ出していました。チームの仲間の存在が心強かったです」(小川さん)。

そして何よりも、塩尻という地域や、地域で働くことへの興味関心が高まった、という声が多かった。「この授業を通して、地域とちゃんと向き合ってみたい、と思うようになりました」(青柳さん)。「原さんや地域の皆さんの話を聞いて、塩尻で働くことに興味が湧きました。今度は自分から地域の人たちと交流する機会をつくれたらいいと思います」(小川さん)。「働くのは面倒くさいと思っていたけど、広報・メディアチームの活動を通じて、働く大人たちがこうやって世の中をつくっているのだとわかりました。授業をしてくださったボランティアの皆さんに憧れています。塩尻市への興味は、0.01から100になりました」(安藤さん)。

校長や先生や大人たちも 探究学習に関わって、心に火がついた

関わった大人たちのほうにもポジティブな変化が出ている。「一番変わったのは、実は校長の私かもしれません。ふるさとぶどう学を実現させるために、商工会議所やさまざまな地元事業所、市議会議員などの皆さんを訪ねて、協力を仰ぎました。そのなかで塩尻を大事に想う多くの方々に出会えたことが、私の財産になっています。学校を地域

に開く第一歩を踏み出せたのです。また、先生方も変わりました。まったく新しいタイプの授業ですから、最初は戸惑う先生もいましたが、徐々に慣れるとともに心に火がつき、モチベーションが高まっていったのです」(校長・小林氏)

地域の皆さんも積極的に関わってくださったという。「事業所の方々が、頻繁に学校に来て直接生徒たちとやり取りしながら、もっと良いものをつくろうとしてくださいました」(小林氏)。「地域企業の皆さんが生徒たちに自分の仕事について語る時、皆さん一様に目が輝くのが印象的でした。実は大人は、子どもたちに仕事のことを語るのが好きなのです」(商工会議所・篠原氏)。

小林氏は、初年度の取り組みに手応えを得ており、今後は同様の学習プログラムを全校に広げるとともに、地域との関係をさらに深めていく予定だという。

第4章 考察

中学生たちが想定以上に地域産業への 興味関心を高めたのが印象に残った

「中学生のうちから、地域の担い手になってもらうための教育をするのは、さすがに早いのではないか」。そう感じる読者が多いかもしれない。しかし、今回のふるさとぶどう学で中学生たちに接してみて、そうではないことが確信できた。生徒たちは、こちらの想定以上に新商品の企画や広報宣伝活動に夢中になって取り組み、地域産業への興味関心を高めたのだ。この1年で、コミュニケーションやプレゼンテーションも皆ずいぶん上手になった。大学受験や就職のことで頭がいっぱいになる前に、地域の面白い大人たちに出会い、働く楽しさや面白さを知り、地域産業に積極的に関わる経験をすることが、地域の未来の担い手を増やす可能性が十分にあることを確認できた。このプログラムは、学校と地域が協働し、各地域の特色を生かすことさえできれば、他の多くの地域でも展開できると考えている。地域によっては、観光に関わる課題を出してもよいだろう。